

## 中国人学習者における複合動詞の習得研究

欒 啓 鵬\*

第二言語習得において、複合動詞の習得はかなり困難な部分である。私の学習者としての経験では、今までの日本語授業で、複合動詞に単なる授業の一項目として学習者に教えることはほとんどいなかった。例文の中で出現したところだけを教えるか、全体で学習者をそのままに暗記させる方法もあるが、学習者にとって、一度学んだだけで、実際の会話、作文の中で使用頻度が少なく、使えるようになるのに時間がかかる。多くの中国人学習者は複合動詞に対して、元の動詞と比べ、全く別の意味になった、或いはただの前項動詞と後項動詞の意味の結合であると思っている。

この論文では複合動詞の分類法の視点に着目して、中国人学習者のコーパス調査と複合動詞の調査を行い、中国人学習者の複合動詞の習得状況を分析して、使用実態を提示し、複合動詞の習得に影響を示す要因を明らかにする。第二章では複合動詞の先行研究を述べる。第三章でコーパス調査の方法を紹介する。第四章でコーパス調査の結果を述べ、第五章は第四章の研究結果に基づいて複合動詞の調査方法を述べ、第六章で複合動詞の調査結果と統計分析を説明する。第七章でコーパス調査と複合動詞の調査についての考察を述べる。第八章で結論のまとめと今後の課題を述べる。

先行研究は日本語複合動詞の分類研究、中国語複合動詞の分類研究と量的な調査三つの部分から説明する。日本語の複合動詞の分類研究では、寺村一長嶋一山本の流れの論文がある。中国語複合詞の分類研究では、邱（2004）、闫（2005）の論文がある。量的な調査では、中国語と日本語二つ分けられて、中国語の量的な調査では苑、黄（1998）の論文がある。日本語量的な調査では陳（2007）の論文がある。

本研究では、複合動詞に関してコーパス調査を行った。KY コーパスと I-JAS コーパスを用いて、母語話者と中国人学習者の比較、KY コーパスと I-JAS コーパスの比較、I-JAS コーパスの書き言葉と話し言葉の比較、三つの調査を行った。本研究では「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」、略称は「I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language)」と KY コーパスを用いて調査を行った。

I-JAS コーパスは、日本を含む 20 の国と地域で、異なる 12 言語を母語とする日本語学習者 1000 人の話し言葉および書き言葉を横断的に調査し、データを収集したコーパスである。学習者には日本語能力テストを実施し、レベル判定を行っている。調査対象者は KY コーパスの中国

---

\*国際人間学研究科言語文化専攻 博士前期課程

語を母語とする日本語学習者 30 名と I-JAS コーパスの中国語を母語とする日本語学習者 100 名、日本語学習者母語話者 50 名である。

学習者がよく使う複合動詞を明らかにした。日本にいる中国人学習者（以後 JSL）と中国で日本語を学ぶ学習者（以後 JFL）に複合動詞の調査を行った。JSL と JFL の差異、分類法、学習方法などの要因が複合動詞の習得にどんな影響与えるかを分析する。

複合動詞の調査対象者は日本語在住の中国人留学生 15 名と中国の大学に在学中の日本語学習者 15 名、合計 30 名である。中国にいる日本語学習者も調査対象には、複合動詞の調査をグーグルフォームを使った。日本在住の中国人学習者には手渡しして調査を行った。一般的に複合動詞を習い始めるのは日本語能力試験（JLPT）N2 級前後であるため、N2 級前後の学習者を調査対象とした。調査方法は学習者の使用頻度が高い複合動詞の中から 20 語を選定し、調査が終了した後に被調査者を追跡インタビューし、被調査者に対して、どの質問が難しかったか、どの質問を推測によって選択したのかなども尋ねて、誤答の選択率とともに、誤答の原因別に分析する。複合動詞の調査は受験者の背景情報と問題の二つの部分に分けられる。背景情報は記入式で、受験者の年齢、日本語学習時間、学習時間方法、自信の有無、日本語レベルについての情報データを収集する。また日本にいる中国人日本語学習者には来日時間、来日前学習時間などの情報も追加で質問した。複合動詞の問題では選択式問題を設定し、調査を行う。複合動詞調査の課題は①学習者が習得しにくい複合動詞の分類から、複合動詞の習得の特徴を調べる。②JSL と JFL それぞれの特徴を明らかにする。JSL と JFL の違いは複合動詞の習得に影響を与えるか。③正誤回答から、複合動詞の習得に影響与える要因を見出す。

正答率と日本語レベルの相関の結果を述べる。ケンドールの順位相関係数で問題の JFL と JSL 正答率と日本語レベルの相関性を検証結果を述べる。つまり今回の調査協力者では、JSL、JFL の正答率と日本語レベルに対して顕著な差を示さなかった。T タイプ、Y タイプ、学習方法、正誤を説明変数とし、日本語レベルを基準変数として線形重回帰分析を行い、日本語レベルは回答の正答率に顕著に影響する。学習方法、正誤は学習者のレベルに影響関係を与える。具体的には、正誤回答、学習方法において標準偏回帰係数が有意だった。個別分析では前項動詞と後項動詞も意味が変わらない。このような複合動詞は中国語でも多い用例があるので、JSL と JFL 両方の正答率が高かった。前項動詞と後項動詞を結合すると、新しい意味になる。受験者からの回答から見ると、JSL でも JFL でも四つの選択肢を選んだ人が多かった。このことから JSL も JFL も学習者が混乱していることがわかる。

コーパス調査と複合動詞の調査結果をまとめる。まず、コーパス調査の結果は表 4 で示したように母語話者は中国人学習者より複合動詞の使用回数が多い傾向が見られたが、逆に中国人学習者使用回数が母語話者より多い複合動詞もあった。つまり、陳（2007）の学習者は全体としては複合動詞使用の頻度も種類も母語話者と比べ、少ない傾向があったが、今回の調査によると、学習者各自がよく使える複合動詞があることが分かった。次に、中国語を母語とする日本語学習者の複合動詞の調査からは以下のことが分かった。まず、熟達度から見て、重回帰分析の結果は表

12にあるように、学習者の日本語レベル能力の上昇に伴い、質問回答の正答率も上昇することが分かった。これは陳（2007）の熟達度が高い学習者ほど複合動詞の使用頻度が高くなり、超級学習者は母語話者と比較的近い使用傾向があるという結果と同じ結果である。また、JSLとJFLの個別調査から比較した結果を見ると、意味は前項動詞と後項動詞の組み合わせで、前項動詞も後項動詞も意味が変わらない。このような複合動詞は中国語でも用例が多くあるので、JSLとJFL両方の正答率が高かった。前項動詞と後項動詞意味は完全に別の意味になった複合動詞は四つの選択肢を選んだ人が多かった。JSLもJFLも学習者がこのような複合動詞に対して混乱すると言える。似ている選択式問題がある場合、漢字だけを見て、意味を推測して選んだ回答が多くある。

コーパス調査の結果から話し言葉と書き言葉共通の複合動詞が多いことと、話し言葉は見出し語数と頻度が書き言葉より多いことが分かった。母語話者との対比では、陳（2007）の調査結果は複合動詞使用の頻度も種類も母語話者と比べ、少ない傾向があったが、今回の調査は母語話者の使用頻度が高いが学習者の使用頻度が高い複合動詞もあることが分かった。会話場面による複合動詞の使用頻度にも違いが見られた。KYコーパスとI-JASコーパスの比較結果から、I-JASコーパスの使用頻度はKYコーパスより多いことが明らかになった。上位を占めている複合動詞も違いがあった。KYコーパスは学習者をインタビューする発話データである。一方、I-JASコーパスは対話、ロールプレイ、ストーリーテリングの三つの部分の発話データから構成されている為に、上位を占めている複合動詞が違うのではないかと考えられる。書き言葉と話し言葉の対比では、話し言葉は回数も語彙数も書き言葉より多いことが明らかになった。同じ言葉でも話し言葉の使用頻度は書き言葉より圧倒的に多いことも分かった。

複合動詞の調査結果から、中国人学習者は寺村の分類方法Ⅱ類、Ⅳ類、山本の分類方法のⅡ類の正答率が低かった。苑、黄（1998）の中国語二字複合詞の結合状況の量的調査から二字複合詞の意味は前項と後項の意味を組み合わせたものが一番多いので、中国語を母語とする日本語学習者は後項動詞の意味が変わる複合動詞が習得しにくいと考えられる。今後、複合動詞の教育では、学習者に後項動詞の部分に着目する必要があると考えている。

カイ二乗検定（クロス分析）を利用してJSL/JFLの日本語レベルに対する差異関係を調べたところ、異なるJSL/JFL学習者は日本語レベルに対して顕著な差を示さなかった。JFLはN1を持っている学習者は9人で、JSLは7人だった。すなわち今回の調査協力者では、JSLとJFLの日本語レベルは近く、学習環境の違いは、JSLとJFLの正誤回答の違いを招く要因とは言えない。相関性検証では、今回の調査協力者では、JSLとJFLの正答率と日本語レベルに対して顕著な差を示さなかった。重回帰分析でも、JSLとJFLの違いと日本語レベルに有意な差が見られなかった。つまり、今回の調査では、学習環境の差異（JSLとJFL）は複合動詞の習得に影響を与えない結果であった。

学習者の正誤回答から見ると、重回帰分析で、学習者の学習者方法と日本語レベルは正誤回答の結果に顕著に影響することが示された。学習方法に関して大学で日本語専攻、日本語学校と塾、

音声メディアラジオとアニメなどの媒介から習得、日本人との交流、独学の五つの選択肢で調べた。その結果、大学で日本語を学んだ学習者の日本語レベルと正答率は、日本語学校で日本語を学んだ学習者、独学した学習者よりも高かった。日本語レベルは回答の正答率に顕著に影響すると言える。すなわち学習者の日本語レベル能力の上昇に伴い、質問回答の正答率も上昇する。これは今回の調査で JSL の学習者は正誤回答の正答率は JFL より高かった原因の一つかもしれない。

今回の調査では寺村の分類と山本の分類と問題の正誤について相関性が見られなかった。複合動詞の 20 問題の設定は各分類による数は均一ではなく、例えば寺村の分類法でⅠ類、Ⅱ類の問題はⅢ類、Ⅳ類より多かった。今後の課題では、各分類の問題数は均一に設定し、改めて分類型と正誤の相関性を検証する必要がある。また、今回の調査協力者の人数が少なく、個人差と偶然性がある可能性があると考えている。そのために JFL と JSL の特徴が正しく見えなかったかもしれない。今後の調査では JSL と JFL の日本語レベル人数を増やして、改めて調査を行う必要がある。また、重回帰分析で大学で日本語を学んだ学習者の日本語レベルと正答率は、日本語学校で日本語を学んだ学習者、独学した学習者よりも高かったことが明らかになった。今回調査対象としての大学生が使っている教材は『新編日本語』であった。日本語学校と独学の学生がよく使用している『みんなの日本語』や『標準日本語』とは異なる。今後は『新編日本語』、『みんなの日本語』、『標準日本語』それぞれの教科書で複合動詞の部分について研究を行い、大学で日本語を学んだ学習者の正答率が高い理由と教材の相関も調査する必要がある。